KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
788

あくまの手のはめあてはあ
うへおくにのてゆふさ
ゆひてるものをうらみて
古へよりかたのゆえにの
るをもちて世をあ
つきくしふるめはふ梅をとりのらせのるハ
あらぬをあてうくひとを受給ことさら
ひて入きるをあてすぢかへふ

俊宗藏

いとまあり果てゝ古今伝授のほ
かるまゝ後のときあらはすものの消息ふ
このつゝまんとする句をあまたあつめて
書たこれをもとゝするに廣狹をも
おもしてをもしろしのおほゝしきをも
百さくつゝをえらひこのへてかいとめ
たくふこゝ
文政ゝきのとしの夫子の田年主つるを

素堂句集

當宿梅

春ちかふあるさ
石垣ふりはめて梅ゝ當る
雪白ゝ山はゝあつてきさき
志ゝの泉ふもうこのふて梅と
よめ孔雀あるゝ梅
梅ゝ生ゝ當はんかほのめきを

雪のふる日

さめくと雪をかくや梅の雪

雪をまとしてはなの梅

たはつかきし

雪の清きをくこそ一ツ歯

おもかもぬぬるの涙か

かなりとしをふるを思出て

うくひすやゆ帰る梅の宿

わらはをまつみそやそ妹ら

まりの涙こそり

ちよほくか雪をるや梅夜

待雪

雪ハまさうさんかうの梅ハふ

降ようのしろもかく

雪と戸ふをふ屋もうへに

安ちしてをるや梅の宿

ほつ〻〻雪を
雪やとの梅の枝うを乃葉
ゆやとの雪を
ワしあれて雪はよし梅の花

羈中

梅か雪旅人中かはさまりを
世をいと〻人も今ハ〻を
かつら子の庵か

あるか靜う梅か雪の只ぬ切り
きへおへぬ垣根の雪の色か
まひひて白ひほのめくあしさより
雪や氣さへよをぬ笠の皮

碎後

雪ふ米ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻梅の花

(3) 中

雪の土〻ふ〻ふ〻を乃や梅の(3)

市中

見渡せば雪か雪花かぬるゝを
見かゝつゝ雪の赤の
白かあゝへるを
雪の底俤時やうめの色
雪かゝく仁の初るに
雪や連配るゝ梅ヤうか
庭中

雪や梅ゝうゝとゝれ白
ふかゝく雪を
雪やなのゝこゝ梅こゝろ
心海の梅
雪やあさむくの梅こゝり
時のるゝ影揚ゝ後たる
さゝふをゝ
雪のゝ業ゝ梅の色

やかきのいとの浦ことう
よりうくるかのさい

せふかれて雪ふる梅の花
つ初の雪をきく

梅の雪うくしたそいつも彩しき

調度おほれ京の雪おく

迫善き人のさまい中

雪めりかる雪一切梅一本

日ぶいあさく炭友の記もし
茶の雪かの時ハねもころかへ
使ふ心うれを長実とのくハはあう

梅折ふ出て雪とあそひ
雪の早くれを雪ふあ
雪のそよ形梅の志かへの者

山庄

戸障子ハ梅雪のときれのか

梅が枝に雪降るのはなのかとも見
さてもひとくとるいろ梅を
梅が香迷まれて出る月もおぼろ
花の香袖かをうつる
うくひすやはさそ日ぐの梅の花
熟の枝ぶりをかの新場か
くもをのまりくいをのつ風
かひるの一つる雪をうつ一は

さいらしや梅雪の陽を彩は
梅より春をつくる
墨をこそもらしを
雪や何のよいしやや梅のる
ほくんを墨をくとみを
ほの雪き雪悪し梅の雪
陸花
ありほのや雪梅が雪ら彩を

梅の木の下かげに男のいと美なるを
見かけて宮と宮うち連れて来給へる
悔の眺めに色かはり
宮の御心や梅のきしくふ
泉殿の宮を
宮の御うしろより梅かゝ尾うしけを
風もまことおのつゝ
ふるきけふの宴

梅かゝ御てに宮もろくゝ入給へる乱
まゝの人の乃ふ梅をまれをけふを
試みるとあくゝて居給へる庵を
宮も見給へぬ恒かゝ時雨を
あるゝの庵の梅さう香りとゝを
ゆさとゝ乃ふ梅ふるもちうてか
ありるとうえて
宮のおうぬ
ぬも梅の約束う

花の名こそ白けれ梅ぞ
梅ぞ〳〵今の雪かへ
梅含芳吉兼紅氣
うくひすの声や梅の香を変
花新開日初明陽潤
雪のこゝろよき日哉白
露暖南枝花始開
什里あひて雪ふるや梅一本

備樓鶯舌両三声
雪や梅白〳〵する声のひま
咽青山鶯啼尚少
かゝぬ雪一輪梅をおる哉
林変容輝宿雪紅
雪ふみ出て雪消し梅の匂
雪未出遣賢在谷
ちいさい雪ふる梅の花

守家一犬迎人吹
梅ゝ咲ゝ習ふ菴の娘の春
孫揚宜作両家春
菖蒲や妹うゝ咲ゝ祖父うゝ春
花飛如錦費濃粧
とかやうゝ咲ゝるや梅の雄
臺頭有酒咲ゝる呼客
咲ゝや収の声梅をも流

東岸西岸柳遅速不同
梅ゝ咲ゝ春ゝ柳ゝ弱してや
林中花錦時用落
咲ゝの形こんてをかしいろ
歌酒家々花處々
咲ゝ梅ゝより梅を浮世哉
林下幽閑氣味深
うくひすやふゝ春を梅を匂ふ

遥見人家花便入
さめ分て咲るやうめのとも
花毎春匂而主不帰
咲ハおくられて梅咲ぬ
春煙途譲簷前色
うくひすの手や梅の内と外
有色易分残雪座
咲の目ゝ別ハ梅の乃理哉

暁風緩吹不言之唇先咲
梅ほちく咲るぬ咲る也おして
花下忘帰因美景
咲や雲ゝ梅の庭樹の生
鶯声誘引来花下
風ゝくと咲るや梅の奥
但憐大庚万株梅
咲や梅一いろをまねへし

養得自爲花父母
うくひすの二川ハ梅の柏子哉
梅花帯雪飛琴上
梅ハ雪春ふるまゝぬれもて
朝蹈落花相伴出
雪ハほゝゝ立てゝ梅の枝
不辨仙源何處尋
雪のゝるゝめゝ梅これ哉

水面毎逢風洗池
梅雪ふゝ雲あゝ深きゝ
勝地本来毎定主
うめハ雪ゝ花ハ春ゝ名不就
落花狼藉風狂後
雪の眠るや梅の一さるみ
終日望雲心不斷
雪のうゝくゝ梅

暗声朝日未晴程
うくひすやかとくを拾ふ梅の函

翠竹煙中暮鳥色
蛍の声さめて梅の入日の影

鳥老帰時薄暮雀
蛍のうるやや梅のもとうかゆ

磋喧猶卧竹窓風
蛍の寒吹しぬ梅の門

佳人盡餐於晨粧
ふるといへど蛍ふるふ影かし

白玉装成庚嶺梅
蛍や梅ふくる日の雄蝶

子孫長作隣墻人
うめか蛍竹の古々の戸戻り

遺老寺鐘敲枕聽
うくひすやふしを寺欣の梅

知君後會知何処
雪や梅を踏出て何度泊る
人間栄耀因孫後
梅よ雪一度も梅よ中すゝ小
千株松下双峯寺
雪や寺を踏出る梅の後
老眠早覚常残夜
梅小雪昔の雄子彼遠
老眼易迷残雨後
日ハくれぬ雪の形り梅の形り
淡水交情老始知
梅よ雪見ぬ人ハ案和尚
暮鳥栖風守廃籬
雪やゝるぬも梅のもの侘
一點窓燈欲滅時
凝ゝ梅雪の影身更

書巻展時逢故人

雪のぬくもりや梅ふたもと苔

省躬還耻相知久

色ぞうつる雪ぬるや梅の花

万歳千秋樂未央

梅いくとも雪も住吾もとみ

梅ハ梅ハ花ハ梅ハ梅ハ梅ハ

ひとりなるかな

文ハ信ものまかこふ人きるかし

ふる雪雪のなかのほろくと

ふ小流のむらを

見ゆる小梅雪の新ろし

ふを待ふとも

雪のひとり侘人梅のそれ

菴あまるあるところ

あやかつて雪可る坊うめ

家しき門ふきそすりを
梅のうめを賞るや門の上
梅ちり賞るもうとうる
ゆのいろ
不賞 魂花ゆ燈この祢
色ハ木綿四まふまうし
香ハ梅禁おふあそひを
賞の忘れくし梅こうふ

祝

君ゝ代や風流のる梅ふ朱て

大坂心齋橋通北久太郎町
鹽屋忠兵衛
江戸日本橋通二町目
野田七兵衛 梓